

日清講和記念館

日清戦争（1894-1895）を終結させた下関条約を記念する博物館。この条約は、日清両国の首脳による 1 ヶ月にわたる交渉の結果であり、日本が領土を拡大し、国際舞台での地位を再定義するための画期的な出来事であった。

記念館には戦争とその終結に向けた交渉に関する文書や資料、及び条約が交渉され調印された会場の再現が展示されている。

日清戦争

日本は明治時代（1868 年～1912 年）に近代化を始め、この文化的転換は国家アイデンティティの転換を伴った。既に欧米諸国との間で不利な条約を受け入れさせられていたこともあって、日本の指導者たちは海外での地位を強化する方法を模索し始めた。朝鮮半島は当初からそうした試みの焦点であった。

朝鮮王朝（1392～1897 年）の最後の数十年間、朝鮮は経済的にも軍事的にも脆弱であり、日本の親帝国主義派は朝鮮を植民地化の格好のターゲットと見なした。朝鮮は日本海を挟んだ対岸に位置しており、そこに前哨基地を設置すれば、将来的な中国進出にも役立つだろう。

朝鮮は何世紀にもわたって中国の属国であり、中国もまた清朝（1644～1911 年）の下で近代化を進めていた。朝鮮政府は清国との強い結びつきを保っていたが、1880 年代からは一部の反乱分子が日本に協力するようになった。1894 年、朝鮮で甲午農民戦争が勃発した時、この対立は頂点に達した。中国は軍隊を派遣して朝鮮政府軍を支援し、反乱はすぐに鎮圧された。しかし、日本は自国軍を朝鮮に派遣して中国の支配に対抗し、最終的には 1894 年 8 月 1 日、中国への宣戦を布告した。

日清戦争は主に朝鮮半島で戦われたが、戦闘は中国本土にも及んだ。日本は陸海空で決定的な勝利を収め、満州の重要港である大連まで占領した。1895 年 2 月に威海衛で中国艦隊が壊滅した直後、両者は和平交渉を行うことに合意し、下関で和平交渉が行われた。

条約

日中講和会議は 1895 年 3 月 20 日、春帆楼という豪華な旅館で始まった。中国側の代表団には、政治家の李鴻章（1823-1901）とその養子李進發（1854-1934）が含まれ、アメリカの元国務長官ジョン・W・フォスター（1836-1917）の助言を受けた。日本側の代表は、伊藤博文首相（1841-1909）と陸奥宗光外相（1844-1897）が率いていた。

中国軍を完膚なきまでに打ち負かしたことで、日本は非常に有利な立場から交渉を開始した。しかし、交渉が始まってわずか数日後、李鴻章が引接寺近くにある彼の宿舎に戻る途中で日本の急進派に襲われた。身の危険を恐れた李はあまり人目につかないルートで会談に向かうようになり、重要な外国人賓客を守れなかったという恥辱が日本の立場を弱めた。

両国は停戦に合意し、1895年4月17日に条約に調印した。日本は中国から多くの譲歩を取り付けることに成功し、朝鮮の完全な独立と自治を認めさせ、数世紀にもわたる朝貢関係を終わらせた。中国はまた、澎湖諸島、台湾、遼東半島の支配権を日本に割譲した。さらに、中国は銀750万キロの戦争賠償金を日本に支払い、沙石港、重慶港、蘇州港、杭州港を日本の貿易港として開放し、日本に対して西洋諸国と同様の優遇措置を与える義務を負った。

下関条約によって、日本は明確に戦勝国となった。中国は何世紀にもわたってアジアで支配的な軍勢力と文明力を持っていたため、この勝利は日本にさらなる領土拡大を推進するための経済資源と自信を与えた。当時、積極的な帝国主義は、近代大国の当然の振る舞いと見なされていた。

記念館

この記念館は1937年、交渉に使われた品々を展示するため、春帆楼旅館の敷地内に建てられた。鉄筋コンクリート造りで、屋号が刻印された特注の瓦が葺かれている。内部には会議室が再現され、周囲の廊下には和平交渉やそのきっかけとなった戦争に関する資料や写真などが並べられている。

日本の不死鳥のモチーフが施された欧風の布張りの椅子は、日本政府が英国で特注したものである。これらの椅子は、廊下の壁に沿った写真に見られるように、代表団が実際に座った通りに配置されている。中央のテーブルに置かれた筆記用具や、近くにあるフランス製の暖房用ストーブも、実際に会合の際に用いられたものだ。

第二次世界大戦中の下関空襲ではこの建物は被害を受けなかったが、隣の赤間神宮はほぼ全壊した。当時この会館が地下のコンクリート壕で神社の御神体を守っていたことから、神のお陰であったという地元の逸話もある。